



・利根町奥山在住

・シャインマスカットをはじめ、ピオーネや柑橘類（10種以上）、リンゴ（3種）、バナナなど多品目の果樹を栽培

・「もっとおいしく」を追求し、独学で研究を続ける

ながさわ さだとし
果樹農家 永沢 貞利 さん (76)

夏の終わりが近づく頃、利根町奥山の一角に、みずみずしく実ったシャインマスカットとピオーネの甘い香りが漂います。毎年、この味を楽しみに町内外から多くの人々が訪れ、直売所は収穫を待ちわびていた人たちにぎわいます。

このブドウが実るまでには、一人の農家が歩んできた長い人生がありました。父を早くに亡くした少年時代、会社勤めと農業を両立した日々、全国から注文が寄せられた南高梅、そして80本の梅の木を切る決断。

「もっとおいしいものを作りたい」その想いは、76歳になった今も変わりません。

今回のシリーズまち・ひと・しごとでは、そんな想いを胸に、利根町奥山でシャインマスカットやピオーネなどの果樹を栽培する農家、永沢貞利さんにお話を伺いました。

農業は、いつから身近な存在だったのでしょうか？

私は生まれも育ちも利根町です。今年で76歳になりました。

父が亡くなったのは、小学校6年生のときです。それからは、母と親戚に助けてもらいながら田んぼを守ってきました。

高校は定時制に通っていたので、昼間は農作業をして、夕方になると学校へ向かう毎日でしたね。親戚の人が手伝ってくれている中、自分だけ学校へ行かなければならない時は、「申し訳ないな」と思ったこともありました。

当時は夢中だったので、大変だとは思いませんでしたが、今振り返ると「よくやってきたな」と思います。あの頃の経験があったから、農業を続けることに抵抗はありませんでした。

会社勤めをしながら農業を続けていたそうですね。

仕事は、龍ヶ崎市の建設会社で、営業として働いた後、1級土木施工管理技士の資格を取得し、現場監督も務めました。平日は会社へ行って、休日は農業。稲刈りの時期には会社を休みながら、田んぼをやっていました。母から受け継いだ田んぼを守ることが、自分の役目だと思っていましたね。

会社勤めと農業の両立は大変でしたが、昔は、お米の値段も良かったので、何とか続けることができました。

果物づくりを始めたのはなぜですか？

昔から果物を育てることが好きだったんです。普通の木を植えても食べられないでしょう（笑）。だったら、実がなる木を植えようと思い、ミカンや桃、柿、レモンなど、いろいろ育てるようになりました。収穫できるとうれしいですし、「来年はもっとおいしいものを作ろう」と試行錯誤しながら考えるのも楽しかったです。

最近、YouTubeの動画で果物の栽培方法を勉強する毎日です。農業は毎年同じようっていて、毎年違います。だから飽きることはありません。